

主 文

本件上告を棄却する。

理 由

弁護人三輪寿壮、同加藤真の上告趣意第一点は憲法違反を主張するけれども、共同審理を受けていない単なる共犯者の供述はただ共犯者たるの一事をもつて完全な独立の証拠能力を欠くものでないと解すべきこと、及び憲法三七条二項の法意が第三者の供述を証拠とするには必ずその者を公判において証人として尋問することを要請したのではなく、従つてその供述に代わる書面をもつて証言に代えることを絶対に禁じたものでないと解すべきことは、いずれも当裁判所大法廷の判例とするところであつて、（昭和二四年五月一八日判決、判例集三卷六号七三四頁以下、昭和二三年七月一九日判決、判例集二卷八号九五三頁以下、昭和二七年四月九日判決、判例集六卷四号五八四頁以下参照）、しかも所論Aは既に死亡しており、本件において共同審理を受けたものではないのであるから、仮りに所論のように同人が共犯であつたとしても、刑訴三二一条にいわゆる「被告人以外の者」に該当すること勿論であり、従つて原審が検察官作成にかかる同人の供述調書を事実認定の資料に供したからとてそれを目して憲法三七条二項及び刑訴三二一条に違反するということとはできない。論旨は理由がない。また、同第二点は事実誤認の主張に帰し、刑訴四〇五条の上告理由に当たらない。なお記録を調べても刑訴四一条を適用すべきものとは認められない。

よつて同四〇八条により裁判官全員一致の意見で主文のとおり判決する。

昭和二八年七月二日

最高裁判所第一小法廷

裁判長裁判官	岩	松	三	郎
裁判官	真	野		毅

裁判官	斎	藤	悠	輔
裁判官	入	江	俊	郎